

# 東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	與田仁志教授送別の辞
別タイトル	Farewell Professor Hitoshi Yoda
作成者（著者）	中田,雅彦
公開者	東邦大学医学会
発行日	2022.03.01
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 69(1). p.21 21.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	退任記念
著者版フラグ	publisher
JaLDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.2021_035
メタデータのURL	<a href="https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD57452394">https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD57452394</a>

# 與田仁志教授送別の辞

中田 雅彦

東邦大学医学部産科婦人科学講座

與田仁志教授のご退任にあたり、甚だ僭越ですが送別の辞を述べさせていただきます。

與田先生は1983年に日本医科大学をご卒業後、日本赤十字医療センター小児科研修医として医師の道に踏み出されました。1987年に1年間、現大阪母子医療センター小児循環器科での研鑽を積み、長きにわたり我が国の周産期医療の中心である日本赤十字医療センターで新生児医療に従事されていました。2010年に本学の新生児学講座主任教授に着任され、数多くの新生児科医を育成するとともに胎児診断にも関わられ東邦大学が全国に名だたる周産期医療施設へと発展するにあたって多大なる功績を残されました。

私が與田先生にお目にかかったのは、産科と新生児科(小児科)が共に所属している日本周産期・新生児医学会の学術集会の場だったと記憶しています。小さな命を守るために、胎児や母体の視点で捉える産科医と、出生した児を懸命に救う新生児科(小児科)医とが、時に協調し時に熱き議論を繰り広げる学会の場で、先生は「どうにかして救うことはできないのか」「データやエビデンスを超えた努力はできないのか」という常に暖かい気持ちのこもった質問やコメントをされているのが印象的でした。約20年前に私が双胎間輸血症候群の胎児治療に取り組み始めたときにも、施設も場所も診療科も異なるのに常に応援していただいたことが忘れられません。

本学の新生児学講座は全国で初めての新生児医学・医療を専門とする講座として設立され與田教授が三代目の主任教授となりますが、文字通り日本の新生児学の中心地です。そのため、本学出身者のみならず全国の様々な大学や施設から医師が集まっています。都心にある大学病院という立地もあるでしょうが、それだけでは人は集まりません。私が本学で與田教授と共に働かせていただき最も感銘したのは、「可能な限り力を尽くす」という使命感にあふれた医療

人としての姿勢です。NICUはハイリスク新生児を対象にし、産科がハイリスク母体・胎児を出生前に管理します。当然ですが児は母体搬送という形で運ばれたお母さんから出生するという経緯が大半です。「NICUが満床だから」「今、重症の児がいるから」ということで母体搬送を断らざるを得ない場合は様々な施設で経験することです。しかし、大森病院総合周産期母子医療センターでは、「可能な限り引き受ける」「無理をしても引き受けたい」というフィロソフィーにあふれており、先生には失礼かもしれませんが、私たちの間では“與田イズム”と親しみを込めてよんでいます。お陰様で、病院に通院中や入院中の妊婦さんが急変し児が生まれそうになっても他の施設へ院外搬送することは減多なことではありませんし、城南地区の患者さんは可能な限り当院で管理が可能です。

先生にあつて他の新生児科医にないことと言えば、極めて優れた胎児診断の知識と経験でしょう。生まれてくる命に対して、産科医と新生児科医が出生前から接する体制は、適切なタイミングで最適の治療を行うと同時に親御さんに不安を和らげる説明が可能であり、先生と共に行う毎週火曜日の周産期合同カンファレンスは東邦大学の自慢の一つと自負しています。

私個人としては、“優しい兄貴分”の與田先生に退任の期日が来てしまうことはとても残念ですが、今後の先生の益々のご発展を願うばかりです。本学が100周年を迎えるにあたり、大森地区再整備計画に伴い今後は周産期センターの再構築が予定されています。與田先生におかれましてはお体を休めて頂きたいところではありますが、後輩の私たち、東邦大学、そして、未来の親子のために今しばらくご助言を賜りますようお願い申し上げます。私のご挨拶とさせていただきます。

與田先生、長きに渡り本当にありがとうございました。